

[活動報告]

ギャラリー展「コロナ時代 ハンセン病回復者からのメッセージ」

吉國 元（国立ハンセン病資料館）

はじめに

2019年12月以来、世界的に大きな脅威となっている新型コロナウイルス感染症⁽¹⁾の日本での感染拡大に合わせて、いくつかの博物館・展示施設がこの新たな感染症に言及をする展示を行った。

管見の限りそれらには大きくふたつの傾向があった。ひとつは吹田市立博物館が2020年7月18日（土）から8月23日（日）に開催をしたミニ展示「新型コロナと生きる社会～私たちは何を託されたのか～」や浦幌町立博物館が2021年2月27日（土）から4月11日（日）に開催をした企画展「コロナな時代を語り継ぐために」のように、新型コロナウイルス感染拡大に関連する印刷物等の地域資料を集め、「モノ」を通じてパンデミックがどのような変化を地域と日常にもたらしたのかを来場者に伝えるもの⁽²⁾。

一方、東京都人権プラザが2021年6月11日（金）から8月5日（木）に開催をした「読む人権 じんけんのほん “感染症と差別”」展は感染症と偏見差別に関する書籍を集め⁽³⁾、テーマをめぐる「人権問題」や「社会啓発」に重点を置いた⁽⁴⁾。

国立ハンセン病資料館が2021年1月22日（金）から2月23日（火）に開催をした「コロナ時代ハンセン病回復者からのメッセージ」展⁽⁵⁾は後者の傾向に近いが、ハンセン病回復者（以下、回復者）による造形作品やマスク等の「モノ」を展示し、療養所内の生活の変化を辿ったことによって、ふたつの傾向を跨ぐものとして位置づけられる。

さらに本展では新型コロナウイルス、ハンセン

病という違いはあるものの、病の当事者の発言を展示の中心に据えたことで他の企画展と異なる博物館展示としての新規性をもった。

本稿は「コロナ時代 ハンセン病回復者からのメッセージ」展について報告をし、新型コロナウイルス感染拡大を巡る状況の中で、回復者のメッセージを伝えることの意義を明らかにする。

1. 本展の目的

新型コロナウイルス感染症の日本での感染拡大に合わせて、患者やその家族、医療従事者等に対しての、偏見や差別などが表面化する事態が新聞やメディアで報じられた。これらの報道に対して、ハンセン病回復者とその家族が、特定の病気による偏見や差別をくり返してはならないと、声をあげた。ギャラリー展はそれらの発言を一同に集め、回復者やその家族が社会に向けたメッセージを発信することを目的に開催した。

また、計らずして「コロナ時代 ハンセン病回復者からのメッセージ」展の開催は新型インフルエンザ等対策特別措置法（平成24年法律第31号）に基づく「新型インフルエンザ等緊急事態宣言」（以下、「緊急事態宣言」）⁽⁶⁾の最中に実施された。



本展のフライヤー

- (1) WHO（世界保健機関）は、新型コロナウイルス感染症の正式な病名を「coronavirus disease (COVID-19)」とした。https://www.who.int/emergencies/diseases/novel-coronavirus-2019/technical-guidance/naming-the-coronavirus-disease-(covid-2019)-and-the-virus-that-causes-it（最終閲覧日2022年2月3日）。本稿では新聞等の記述に倣い、「新型コロナウイルス」または「新型コロナウイルス感染症」と表記する。
- (2) 他に浦幌町立博物館企画展「コロナな時代のマスク美術館」（会期：2020年8月1日から9月27日）、ニュースパーク（日本新聞博物館）緊急企画展「新型コロナと情報とわたしたち」（会期：2020年7月18日から9月27日）などがある。
- (3) 歌手の沢知恵氏が選者としてハンセン病に関連する書籍を選書した。
- (4) 同展は2021年8月12日（木）から8月16日（月）に武蔵野市立「武蔵野プレイス」1階ギャラリー、2021年8月18日（水）から8月24日（火）に八王子駅南口総合事務所多目的スペースにて巡回展示を開催。
- (5) 本展の担当は国立ハンセン病資料館の吉國元、オブザーバーに同館の木村哲也、また2020年度に入館をした同館の牛嶋渉、重監房資料館の鎌田麻希、松浦志保も新人研修として一部の業務に携わった。
- (6) 東京は2回の期間延長を経て1月8日（金）から3月21日（日）に発令。https://corona.go.jp/emergency/（最終閲覧日2021年9月18日）。

当館でも感染防止対策と職員の在宅業務が導入され、隣接する国立療養所多磨全生園含む多くの国立ハンセン病療養所に来園制限が設けられた。このような状況の中で、準備から開催に至るまで、多くの博物館や美術館と同様に当館も「ウィズコロナ」時代⁽⁷⁾に対応する新たな啓発と展示のあり方が迫られた。

2. ハンセン病と新型コロナウイルス感染症

志村康氏(菊池恵楓園入所者自治会会長)は、「ハンセン病と新型コロナに共通するのは患者本人のみならず、家族や治療に当たる医師や看護師、さらにその家族までもが差別の対象となる点です。」⁽⁸⁾と指摘している。

もとよりハンセン病と新型コロナウイルス感染症とは、その病態、歴史的背景や対策が大きく異なるが、この時期に回復者たちが声をあげた根本の理由は、志村氏の発言にある通り、新型コロナウイルス感染症による偏見や差別が、ハンセン病のそれと同じように、共通して特定の病気を理由とし、その周囲にも及んでいる点である。

3. 準備から開催に至るまで

コロナ時代にハンセン病回復者は何を視て、何を感じていたのだろうか？

各園の感染対策によって、他園への移動、高齢となる回復者への直接の聞き取りは断念せざるを得ない中、まずは回復者の発言を把握するため、当館の図書検索システム⁽⁹⁾を利用し2020年を中心に全国の主要な新聞、各療養所の自治会機関誌(以下、園誌)を調査した。

その結果、新聞から194本の記事を集め、ハンセン病の回復者だけではなく、回復者の家族、ハンセン病問題と関わりのある弁護士や弁護士、有識者、支援者、医者等の声明も少なくない記事に掲載されているのが判った。準備の段階で全ての記事を集めリスト化した⁽¹⁰⁾、本展では黄光男氏

(ハンセン病家族訴訟原告団副団長)を除き、発言者がハンセン病の回復者であるという条件に絞った。そこから、発言を整理し、展示で紹介すべき言葉を検討した。

メディアや新聞に複数回登場をする療養所があり、一方で掲載が極端に少ない、あるいは見当たらない療養所もあったが、可能な限り全国の回復者、社会復帰者をも含めて、紹介するように心掛けた。

さらにインターネットでの調査も合わせて、最終的に新聞とウェブから15名、書籍『心をたもつ ヒント76人が語る「コロナ」』(共同通信社、2021年)から1名、園誌に掲載された2名を合わせた18名のメッセージを選出した。

また、新聞やウェブの記事とは別に、コロナ時代のハンセン病回復者たちの声を伝えるものとして、園誌から短詩形文学作品を8名、ユーモラスななぞなぞを1名選出した。

さらに木彫のアマビエ像、木彫のうちわ1点と塗り絵5点を国立療養所菊池恵楓園の入所者自治会から、陶芸によるアマビエ像を国立療養所邑久光明園の福祉課から、回復者による手作りのマスクを国立療養所沖繩愛楽園の福祉課の協力を得て紹介した。

次に重要な手続きであったのが、本展で紹介するために、発言者である回復者の許諾を得ることだった。ほとんどの方へは電話、または自治会の担当者を通じた相談となり、対面で挨拶出来なかったのが歯痒かったが、協力を依頼した全員の承諾を得ることが出来た。

4. 展示方法

本展では短詩形文芸作品、造形作品を除く新聞、ウェブ、園誌に掲載されたメッセージに関して、発言者の顔の写真も合わせて展示することを重要と考えた。氏名、肩書、発言内容と顔写真を1枚のパネルにすることによって、回復者のメッセージがより説得力を持つと考えたからだ。顔写真の

(7) 「問題の長期化を予想する立場からは、ウイルスとの共存を目指すとの意味でウィズコロナ、ニューノーマルなどの言葉も登場している。」(『現代用語の基礎知識2021』自由国民社、2021年) 190頁。

(8) 「コロナとハンセン病 変わらぬ差別「禁止法」を」(『熊本日日新聞』朝刊、2020年6月12日) 23頁。

(9) ハンセン病「新聞雑誌記事」目次検索<http://www.hansen-dis.jp/newsmag/>

(10) 194本の記事のうちハンセン病回復者の発言が掲載されたのは42本。



会場の様子

紹介も回復者の協力を得た。

短詩形文芸と造形作品に関しては、表現している内容や性格を鑑みて、顔写真は掲載せず、作品と作者名、療養所名の記載のみに留めた。後述するが、新聞紙に掲載された言葉と園誌の作品は、それぞれ別の質と特徴があり、それらを対比するためにウェブ、新聞誌、園誌のメッセージは横書きに、短詩系文学作品は縦書きのパネルにして展示した。前者はギャラリー展の壁面に、後者は展示台の上に造形作品と並べて展示した。

新聞とウェブに掲載された回復者の発言は、ある程度まとまった取材や聞き取りから、記事が置かれている文脈、各媒体の傾向、記者の関心によって、聞き取りの一部を抜粋して紹介したものであると考えられるが、ギャラリー展ではそこからさらに一部を抜粋し、個々の発言を可能な限り短くして展示した。それは個々のメッセージが持つ言葉の力を際立たせるのが狙いでもあったからだ。

一方で発言が置かれている文脈を明確にするため、個々の発言を新聞や園誌に掲載された日付順に並べ、引用元となるオリジナルの記事を合わせて並列した。また発言時の社会状況を示すために2020年の新規感染者数の推移グラフ⁽¹¹⁾も場内に展示した。

5. 回復者のメッセージについて

本項では本展の壁面に紹介をした18名のメッセージをまとめ、それぞれの発言に込められた回

復者の想いについて考察する。

18名の発言を一同に並べることによって、回復者が複数の事柄に関して強い危機感を感じていることが判った。

まず新型コロナウイルスの感染拡大によって、啓発活動が滞ること（太田明氏）、あるいはそれが十分でなかったことによる危機感がある（金城雅春氏等）。

続いて、現在の新型コロナウイルスによって繰り返される偏見や差別に対する危機感がある（岸従一氏、石山春平氏、志村康氏、黄光男氏、森和男氏、小鹿美佐雄氏、野村宏氏、中尾伸治氏、中修一氏、豎山勲氏等）。

最後に新型コロナウイルスの脅威に対する危機感がある（山岡吉夫氏、岩川洋一郎氏）。

分類はあくまで個々の発言に基づくが、社会の状況に合わせて、回復者が感じている危機感の重点が揺らいでいるのが判る。

また各新聞紙の取材の傾向でもあるが、発言者の全てが男性であり⁽¹²⁾、組織の中で肩書を持つ回復者が大半を占めた。各療養所の自治会会長、副会長、盲人会会長、全国ハンセン病療養所入所者協議会事務局長、ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会事務局長等、平沢氏のように前自治会会長もそのような肩書のひとつである。このことによって判るのは、新聞やメディアの取材に応えることが肩書を持つ発言者の職務のひとつであり、それが偏見差別を除去するハンセン病問題の当事者による社会啓発に繋がっていることだ。

以上を踏まえ、改めて個々の発言を読み込むと様々な切り口が社会啓発にあることが判る。

字義通りその意義を説くのは太田明氏、金城雅春氏。

社会の動きに警告をしているのは岸従一氏、石山春平氏。

戦前・戦後の「無らい県運動」等、近年に至るハンセン病問題を踏まえた発言は志村康氏、森和男氏、小鹿美佐雄氏、野村宏氏、中尾伸治氏。

(11) 厚生労働省ホームページのオープンデータを基に作成した。
<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/open-data.html>（最終閲覧日2021年9月18日）。

(12) 杉野桂子氏のメッセージは女性による発言として貴重なものであるが、こちらは園誌の編集後記にあった発言である。

表① メッセージ一覧 ※新聞記事の引用にあたっては、読みやすさを考慮して、適宜、句点を付した。

掲示順	メッセージ	発言者・氏名	肩書
1	病気で苦しむ人を責める言葉が今も社会で飛び交っているのは悲しい。	岸従一	栗生楽泉園入所者自治会会長
2	啓発のブレーキがかかったことは残念。新型コロナと通底する問題があるだけに、もどかしい。	太田明	菊池恵楓園入所者自治会副会長
3	元気を出して、耐え抜きましょう。私たちには明日があり、未来があります。	平沢保治	前・多磨全生園入所者自治会会長
4	病気そのものは痛くもかゆくもない。本当に怖いのは社会。	石山春平	社会復帰・あおばの会会長
5	「いのちと暮らしを守る」政治へ舵を切ってほしいものです。	杉野桂子	菊池恵楓園入所者自治会機関誌『菊池野』編集長
6	今の若い世代の人たちはハンセン病について知らない人も多いかもしれない。でも知らなければ同じことを繰り返す可能性もある。	金城雅春	沖縄愛楽園自治会会長
7	差別する側に差別意識はありません。そして、その意識は身近な人に連鎖します。	志村康	菊池恵楓園入所者自治会会長
8	市民が患者を『ばい菌』扱いし、社会から排除した。	黄光男	ハンセン病家族訴訟原告団副団長
9	「自分がなったなら」の視点を常に持ち、感染者や医療従事者に思いやりの言葉を掛けてほしい。	藤崎陸安	全国ハンセン病療養所入所者協議会事務局長
10	市民の方たちの憩いの場であることは喜ばしいが、私たちにとって（感染の）脅威が完全になくなったわけではない。喜びと脅威が同居しているのが正直なところ。	山岡吉夫	多磨全生園入所者自治会会長
11	ハンセン病差別、偏見と闘ってきた者として、絶対許すことができない。	森和男	大島青松園入所者自治会会長・全国ハンセン病療養所入所者協議会会長
12	家に住めなくなり、生活が壊れてしまう可能性もある。	小鹿美佐雄	国立駿河療養所入所者自治会会長
13	「隔離」という言葉は、過酷な記憶を呼び起こす。（中略）『無らい県運動』と同じ。	野村宏	大島青松園入所者自治会副会長
14	この世にできたことはこの世でいつか収まるはずだ。	松本常二	大島青松園盲人会会長
15	コロナの感染者やその家族が、社会から排除される風潮は、ハンセン病の患者と重なる部分がある。	中尾伸治	長島愛生園入所者自治会会長
16	僕もコロナは怖い。しかし悪いのはウイルスであって、かかった人じゃない。	中修一	社会復帰・菊池恵楓園退所者ひまわりの会会長
17	一世紀にも及ぶ偏見、差別の中で生きてきた私達には、それを超える気持ちがある。	岩川洋一郎	星塚敬愛園入所者自治会会長（※2021年3月退任）
18	いかなる疾病であろうとその故をもって偏見や差別があってはならないと云うのが、ハンセン病問題の教訓である。※発言者の希望により、引用の言葉と記事が若干異なります。	豎山勲	社会復帰・ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会事務局長

※ウェブ媒体の最終閲覧日はいずれも2021年9月14日。

※組織名・肩書は当時のもの。

記事名／著作名	媒体	発行／掲載日
「患者差別の過ち繰り返さないで」 コロナ禍にハンセン語り部らが警鐘	徳島新聞 電子版 https://www.topics.or.jp/articles/-/352001	2020.04.17
ハンセン病啓発に影 コロナ禍 恵楓園で来園制限	熊本日日新聞、朝刊	2020.04.21
平沢保治氏から市内小・中学校の皆さんにメッセージが届きました	東村山市HP https://www.city.higashimurayama.tokyo.jp/shisei/koho/pickup/r02pickup/hirasawasimessage.html	2020.05.08
「本当に怖いのは社会」「過ち繰り返さないで」	神奈川新聞、朝刊	2020.05.24
編集後記	菊池恵楓園自治会機関誌『菊池野』 2020年5・6月号	2020.06.10
レポート'20名護発 ハンセン病 史実脈々	沖縄タイムス、朝刊	2020.06.11
コロナとハンセン病 変わらぬ差別「禁止法」を	熊本日日新聞、朝刊	2020.06.12
読んでみよう 解いてみよう さん太のワークシート 「瀬戸内のハンセン病回復者ら」「コロナ差別 人ごとでない」	山陽新聞、朝刊	2020.06.14
ネットでの中傷 保育所の利用拒否・・・ 新型コロナ 人権侵害なくそう	公明新聞、朝刊	2020.06.24
全ての国立ハンセン病療養所 コロナ懸念立ち入り制限	京都新聞、朝刊	2020.06.26
全ての国立ハンセン病療養所 コロナ懸念立ち入り制限	京都新聞、朝刊	2020.06.26
NEXT特捜隊 あなたの疑問調べます ハンセン病元患者 コロナ差別「同じ過ち」	静岡新聞、朝刊	2020.06.26
コロナ患者への差別やめて	高知新聞、朝刊	2020.07.31
相次ぐコロナ感染者への誹謗中傷 憎むべきは「病気」	愛媛新聞、朝刊	2020.08.23
「患者への社会風潮」考える 「ハンセン病とコロナ」トーク 長島愛生園	読売新聞 岡山版、朝刊	2020.08.30
「なりたくてなった人いない」	『心をたもつヒント 76人が語る「コロナ」』 (共同通信社、2020.09.20)	2020.09.20
「恐怖の新型コロナウイルス」	星塚敬愛園入所者自治会機関誌『始良野』 2020秋季号	2020.09.30
コロナ禍、反省生かされず ハンセン病の政府追悼式で	日本経済新聞（共同通信社） https://www.nikkei.com/article/DGXMZO65618430Z21C20A0CR8000/	2020.10.29

園内の様子と回復者の想いを伝える発言は、山岡吉夫氏、岩川洋一郎氏。

病気と患者を同一視した過ちを指摘するのは黄光男氏、中修一氏。

医療従事者に対して言及しているのは藤崎陸安氏⁽¹³⁾。

最後に発言の多くが反省を促し、社会への警告となる中で、メッセージの聞き手を鼓舞あるいは勇気づけているのは平沢保治氏と松本常二氏である。前者の発言は東村山市の中学生に向けられたメッセージであり、後者は永らく不治の病と考えられていたハンセン病がプロミンと多剤併用療法の登場によって治る病気となったことを想起させる⁽¹⁴⁾。

以上の発言内容、その傾向と肩書から判るのはそれぞれの発言が個人の意見に留まるものではなく、発言が所属している自治会や組織を代表するものであるという点だ。さらに、岩川洋一郎氏の発言から判る通り、いくつかのメッセージはハンセン病の回復者全体の思いを代弁する意図がある⁽¹⁵⁾。

次に本展で紹介をした8名の短詩系文学作品と1名になぞなぞを紹介し、その意義を考察する。

新聞やウェブに比較して、女性が多く登場するのが各療養所の園誌である。特に短詩形文学作品は新聞に掲載された発言とは対照的に、公的肩書のない回復者のパーソナルな日常のつぶやきとして記されたものが多く、療養所内の生活について知る手掛かりとなる。

三上果穂氏は自家栽培と思われる野菜に触れる手ごたえを歌い、生きることと直結した食のありがたさを描写する。岡崎千津氏は療養所の内外を繋ぐ「買い物バス」が回復者にとって楽しみなものであると書き、その中止を嘆く。同じく東方重治氏は感染拡大防止対策のために中止となった盆踊りについて歌っている。

同様に森和男氏のなぞなぞは、多くの来園者を招く瀬戸内国際芸術祭を大切なイベントとして記している。

余田加寿子氏の歌は瀬戸内海と思われる海に対する作者のまなごしであり、「こんなとき」「励ましてくれる」という記述によって新型コロナウイ

表② 機関誌掲載作品一覧

作 品	作 者	発表媒体	療養所
ウイルスのニュースに疲れ畑に来れば手入れに応える野菜の生氣	三上 果穂	『楓』2020年5・6月号	邑久光明園
楽しみの買い物バスは中止との放送ありてショックを受ける	岡崎 千津	『楓』2020年5・6月号	邑久光明園
ハグ握手できぬ絆も遠ざかる	山内 宅也	『楓』2020年7・8月号	邑久光明園
盆踊り憎いコロナが押し潰す	東方 重治	『楓』2020年7・8月号	邑久光明園
コロナとの戦いいつまで続くやら	小島ひで子	『愛生』2020年7・8月号	長島愛生園
こんなとき励ましてくれる島の海	余田加寿子	『愛生』2020年7・8月号	長島愛生園
隔離とは／経験した私には解る／生き甲斐がない／生きるを道求めて／掴んだ今の幸	山内きみ江	『多磨』2020年8月号	多磨全生園
人間はコロナなどには負けはせず	三芳 晃	『多磨』2020年9月号	多磨全生園
なぞなぞ「新型コロナ」とかけて 瀬戸内国際芸術祭と解く 心は、みんなよぼう（予防・呼ぼう）	森 和男	『青松』2020年9・10月号	大島青松園

(13) バネルでは紹介出来なかったが、志村康氏は本展で紹介をした記事の中で医師や看護師にまで及んだ差別に関して指摘している。「コロナとハンセン病 変わらぬ差別「禁止法」を」（『熊本日日新聞』朝刊、2020年6月12日）23頁。

(14) 発言当時はワクチン接種の目途が不透明な時期。

(15) 本展で紹介をした発言がハンセン病回復者の総意でない事も留意したい。新聞やウェブの取材によって発言の機会があった回復者がいる一方で、そのような機会が無かった回復者もいる。また文学や作品作りに携わらない回復者もいる。本展で紹介しきれなかった回復者の思いがあることもお断りしておく。

ルス感染拡大における心理的な影響を示唆する。

このように園誌に見られる短詩系文学作品は、必ずしも新聞に掲載された言葉のようにハンセン病問題に直結した社会啓発を意図しないが、新型コロナウイルス感染拡大による生活の変化、作者の気づき、戸惑いや憤りをも表現し、詩作を通じた現実認識を静かに来館者に語る言葉であった。

6. 造形作品について

ギャラリー展のフライヤーに掲載した松健次作のアマビエ像⁽¹⁶⁾は、菊池恵楓園入所者自治会機関誌の『菊池野』2020年7月号に掲載され、菊池恵楓園の外來棟に飾ってあったものだ。アマビエは疫病退散のシンボルとして、コロナ時代の中で馴染み深くなったキャラクターであり、松健次氏の朴訥とした木彫の造形と着色によって、より愛らしく感じられる作品となっている。

アマビエの塗り絵に関しては、菊池恵楓園入所者自治会機関誌編集長の杉野桂子氏が電話で話してくれたエピソードを紹介する。(2021年1月8日に聞き取り)

杉野氏の夫である杉野芳武氏の命日に友人たちが集まった際、友人のひとりがコピーをした塗り絵と色鉛筆を持参したそうだ。アマビエのモチーフも相まって、塗り絵の輪は友人から友人へと、またりハビリも兼ねて園内に拡がったという。

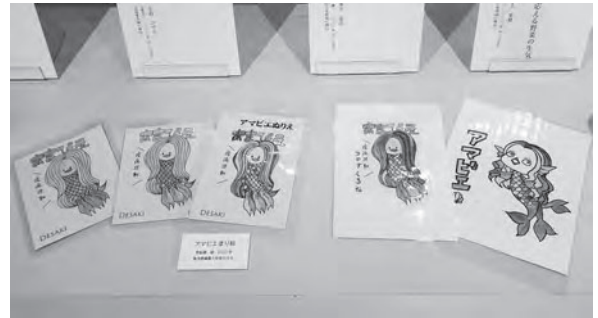
一方で国立療養所邑久光明園の福祉課からお借りしたアマビエ像は、釉薬による色彩が味わい深い陶芸作品であり、同園の豊かな作陶の文化を示すものだ。

沖縄愛楽園の福祉課から提供頂いた入所者による手作りマスクは、沖縄愛楽園自治会が発行している広報誌「あいらく」第48号(2020年7月15日発行)によると、当時品薄になっていたマスクをお互いにアイデアを出しながら、入所者とともに作ったそうだ。沖縄らしい鮮やかな染物で作られたマスクである。

これらの造形作品は療養所内のユーモアや遊びの精神を伝え、さらに杉野氏の話の通り、回復者



造形作品



アマビエ塗り絵 (協力：株式会社 出先)

同士の繋がりや交流を示唆する。同じく療養所の職員との交流は国立療養所沖縄愛楽園のマスクにも端的に表れている。

一方でユーモアや遊びだけではなく、手の痕跡が残る造形作品は回復者の存在証明としても受け止める事が出来る。それは木彫や作陶という技術の鍛錬が必要なものから、塗り絵等も含めてさまざまあり、いずれも造形や色彩に回復者の感性が刻まれている。

最後に造形作品や塗り絵に表れるアマビエのイメージは、回復者が新型コロナウイルス感染拡大の収束を願っていることを伝えている。

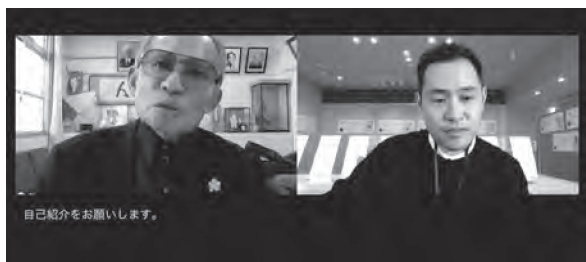
7. 岩川洋一郎氏のインタビュー

『コロナ時代 ハンセン病回復者からのメッセージ』展の関連イベントとして、回復者の岩川洋一郎氏にオンラインを通じたインタビューを依頼し、配信をした⁽¹⁷⁾。

本インタビューの目的は、岩川氏が星塚敬愛園自治会機関誌『始良野』2020秋季号に掲載した著作「恐怖の新型コロナウイルス」を参照して、よ

(16) 松健次作「木彫うちわ」も本展で紹介をした。

(17) インタビューはオンラインのZoomアプリを利用し、星塚敬愛園の入所者自治会、星塚敬愛園園長の山元隆文氏、同社会交流会館の原田玲子学芸員の協力があって実現した。



オンラインインタビューの様子

り詳細に具体的な話を聞くことである。

インタビューを実施した2021年1月19日（火）時点で、岩川氏は国立療養所星塚敬愛園（以下、星塚敬愛園）の自治会会長を担っていたが、同年1月末に退任している⁽¹⁸⁾。話を聞いた時期は東京で新型コロナウイルスの感染が急速に拡がり⁽¹⁹⁾、全国的にも予断を許さない状況にあった。

本項では、新型コロナウイルスの感染拡大に関する岩川氏の発言をまとめて報告をし、その意義を記す。

以下では氏の話ぶりを大切にするため、発言内容に関しては可能な限り編集を加えないが、氏の意図をより正確に伝え得る場合、著作「恐怖の新型コロナウイルス」を参照し、最小限に言葉を整理し、著者による補注は（ ）内に記す。

星塚敬愛園の近況について

（星塚敬愛園では）入所者のことを町民と言うのですよ。ここは星塚町ですから、町民と言います。今町民は92名になりました。平均年齢が87.8歳です。職員は350名います。

去年は（町民が）20名亡くなったんです。でもそれは流行り病（新型コロナウイルス罹患が原因）とかじゃなくて、70代の方が1人、80代の方が2人か3人、あとはみんな90代です。

（今は新型コロナウイルス感染対策として、葬儀の出席は県内の遺族を2名までとし、県外の方はお断りしている状況です。）施設から（出席するのは）園長、事務長、看護部長、ケースワーカー

2人。町民は自治会長である私が1人。本当に寂しい、そして悲しい。なぜこのような形での葬儀をしなきゃいけないのか。

葬儀のときには（私が）遺族を代表して、誰もいないところで挨拶をしなきゃいけない。私は誰もいない会場で、言葉を、挨拶をするということは、本当に苦しいというよりは、胸の中で泣いた。寂しい。苦しい。

（町民の）皆さんもね…やっぱり皆さん苦しい、悲しい。何も出来ないから、行事そのものが。たまたま去年は創立85周年記念だった。でも行事すらなんにも出来ない。コロナに関してはまだまだ、私は今からまだ本番じゃないかと、そういうふうに思っています。

患者やその家族、医療従事者に対するの偏見や差別について

偏見差別というのは、ここに勤めとった職員の皆さんも、やはり今のコロナのような形でね、差別を受けとるの。「あれはらい病の園に働いとる。だから気を付けろ。」と。

なぜコロナになった人たちをそのような形で偏見差別の目で見ると。それはやはり（コロナが）命を脅かす怖い病気（だから）。また無症状の人（もいます。）でも無症状といっても、そういう人は（星塚敬愛園には）いない。ここいるのは職員の皆さんだけ。

私がいつも（職員に）言っていることは、「寄り添ってください」という、そういう言葉。（町民は）職員の皆さんに頼るしかない。

職員の皆さんがどれだけご苦労されているかってことは、私たちがわかっていますと。家庭もある子どももある、そういうなかで私たちが看取ってくれる。

（感染対策として）職員の皆さんは今まで3日に1回買い物行ったものが、1週間にいっぺん（にさせていただいたり）、ときにはもう夜中に行くとか、人のいないときに行くとか（そういうお願い

(18) 2004～2005年に自治会長に初就任、2007年より会長。ハンセン病制圧サイトLeprosy.jpを参照。
<https://leprosy.jp/people/iwakawa/>（最終閲覧日2021年9月18日）。

(19) 「東京都は19日、火曜日としては2番目に多い1240人が都内で新たに新型コロナウイルスに感染していることを確認したと発表しました。」
「東京 新型コロナ 死亡は最多16人 感染確認1240人 重症者も最多」『NHK NEWS WEB』2021年1月19日。
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210119/k10012822001000.html>（最終閲覧日2021年9月18日）。

をしています)。私はね、職員の皆さんのお力がなければ、私たちは生きられませんか、そのように、いつも園の幹部には言っています。

(中略)

私たちに家族がいます。私も屋久島に1人妹がいます。福岡に弟が1人います。屋久島の妹は、学校で、すごく頭が良かったもんだから、成績が良く学校の先生になろうという気持ちがあったんだろうと思います。しかし、実際は鹿児島で有名な山形屋⁽²⁰⁾っていうところに勤めた。

そして東北の人と知り合って結婚するようになったんだけど、お袋は、一人娘だからそんな遠くへ行くなと(反対をしたが、それでも妹は遠くへ)行った。そして、付き合いが始まって結婚するという段階になったときに、私がここにいることが分かったんでしょうね、多分。そして、結婚して1年ぐらいたら離婚させられた。そして、精神を患ってしまった。それ以来、私は鹿児島の精神病院に(見舞いに行っています)。年を取るにしたがってずっと良くなっていますね。(でも)やはり精神を患ったというのは、私がハンセン病だったということ(離婚をさせられたのが原因だと思います)。

家族訴訟⁽²¹⁾が、すごくいい形で終わったんだけれども、まだ、私たち、ハンセン病療養所で暮らしている家族がいる。親はもうなかなかいないけれども、兄弟姉妹、そういう人たちは、今でもね、縁を切ってくれてというんです。もし、私たちがきょうだいの中でハンセン病者がいるとなれば、離婚をさせられるんです。

それで、社会復帰者の人は結婚して子どもが生まれた。その子どもに、自分がハンセン病だったと

いうことを言えない。そういう人がたくさんいます。だから、ハンセン病患者(回復者)がコロナのあれ(差別)より強いというところは、そこなんです。そういうところをじっと我慢しながら、生きていく。家族のことを思い、きょうだいのことを思い。まだ今でも、偏見差別は家族の中にあるんです。わかりますか？

私は、啓発活動の時にはこう言ってる。99%の人たちはハンセン病に対しての偏見差別は、私はないと思っています。しかしただ、日本の伝統的なそういうもののなかに、「らい病」というものが忌み嫌われたことが、どうしても皆さんの心のなかにあるんです。実際あるんです。ただし、表立って偏見差別(を露わにしない)。でも日本人の気持ちのなかには、それがかすかに残っています。だから、それを悟って、きょうだい…私の妹、弟ももう今は70に近いですが、今度は家族裁判で訴訟を起こしましたが、それも独り者なんです。それで私は、弟もやはり私がハンセン病だったから独りで過ごしたんだろうということ言ったら、弁護士が、「岩川さん、弟さんはそういうことを言いませんよ。“私は兄貴がハンセン病だから嫁さんをもらわなかった”って、そういうことは言わなかったよ。」ということで、でもそれは、私はどうかなと、疑問に思っています。

(感染拡大が深刻化する中で)政府はどのようなことをするのかっていうのは、罰則とかなんとか、どうするこうするというを言っていますね、今。入らなければ罰を与えて罰金を取るのか⁽²²⁾(しかし、罰則化よりも)政府が積極的にやらなきゃいけないことは、まず医療従事者を充実すること、(療養のための)場所を提供すること。

(20) 鹿児島県鹿児島市に本社を置く百貨店。南九州地域(鹿児島・宮崎両県)で5店舗を展開している。

(21) ハンセン病家族国家賠償請求訴訟のこと。ハンセン病患者(元患者)を家族にもつ原告らが、国の隔離政策による被害への謝罪と補償を求めて国を提訴した。2019年6月28日、熊本地裁で原告の訴えを認める判決が出され、国は控訴をせずに一審判決が確定した。

(22) 岩川氏が述べている「罰則化」については、これに対するハンセン病違憲国家賠償請求訴訟全国原告団協議会の動きと合わせて、以下の記事を紹介する。「新型コロナウイルス対策をめぐり、入院拒否に懲役刑などの罰則を設けた感染症法改正案が閣議決定されたことを受け、ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会は22日、改正に反対する意見書を国や野党などに送付したと明らかにした。「基本的人権尊重の観点から許されず、感染症まん延防止の観点からも極め付きの愚策」としている。意見書では、過去にハンセン病患者が国の強制隔離政策で偏見や差別の対象となり、「社会の中で居場所を失った」と指摘。新型コロナ患者に刑事罰を設ければ、差別や偏見がますます助長され、「感染の事実を隠す人も出てくる」とした。鹿児島市内で記者会見した同協議会の壺山勲事務局長(72)は、ハンセン病患者は強制隔離されるべきだと法律で位置付けられたことが被害の要因となったと強調。「(ハンセン病の)強制隔離と何も変わらず、何も学んでいない」と批判した。」「入院拒否に罰則「許されない」ハンセン病元患者ら意見書―感染症法改正案」『JJI.COM』2021年1月22日。https://www.jiji.com/jc/article?k=2021012201183&g=pol(最終閲覧日:2021年9月14日)。続いて2021年1月28日には「新型インフルエンザ対策特別措置法と感染症法の改正案について、入院に応じない感染者への刑事罰の撤回などの修正を行うことで正式に合意した。」と報道された。「感染症法改正案、「刑事罰撤回」で自民・立民が正式合意…「50万円以下の過料」に」『読売新聞オンライン』2021年1月28日。https://www.yomiuri.co.jp/politics/20210128-OYT1T50257/ (最終閲覧日:2021年9月14日)。

これはやっぱり政府が、今はちょっと遅れている。そういうふうに思っています。

コロナウイルスに関しては、本当に命が危ない、そう思って近づかなければいい。しかしそれに対しての偏見差別を持つてはいけないというのは、これはやはりハンセン病と一緒にです。国は昭和6年に無癩県運動を始めて、強制隔離をした。今まさに、コロナに関してもそのような形で（同じことが繰り返されるといふ）思いが少しあるのよ。そう私は思っている。

著作「恐怖の新型コロナウイルス」の中で、結びを「新型コロナウイルス、私達が生きている内に消えてください。そう願うばかりです。」とした心境

（町民の）悲しさ、寂しさ、苦しさ。それを私は思うときに、なんとかして早く、町民の人たちがね、本当に生涯こういう隔離施設の中で暮らさざるを得なかった、（だけれども最後には、）本当に生きてきて良かったな、という思いでこの世を去るということができれば、それ以上のことはない。

（療養所に）コロナが入ってきたら、もうどうしようもできないような状態になりますけども、私たちが生きている間にコロナが無くなればいいというのは、やはり安心した形で…例えばね、今病棟にいる。具合が悪くなった。昔はね、何十名の人たちがそこに行って最期を看取った。今はそれもできない。三密を避けて。だから私たちが生きているあいだにコロナが無くなったときは、もし仮に私が亡くなったとき、何十名という人たちが来て、私を看取ってくれるでしょ。「よく今まで頑張ったね、ありがとうね。」と言ってくれるかもしれない。

私たちに残された時間は無い。そのかわりにやはり、施設の皆さんと、地域の皆さんと面会ができないともう本当に、寂しい、苦しい、悲しい。

だから皆さんもね、コロナに負けるな、負ける

んじゃないくて…コロナに勝つというよりは、どうしたら救えるか（を考えてほしい）コロナに勝てるわけない。

私たちは今外出もできませんから、私は一歩も出てない。だから職員の皆さんにどうしてもその代わり犠牲というよりは、私たちのために頑張ってください、そういうお願いをするしか今のところございません。

8. インタビューを終えて

岩川氏のインタビューは入所者を守らねばならない決意や責任感が言葉の端々や表情に表れ、園内の切迫した雰囲気や伝わる配信となった。こちらはパネルではなく肉声によるオンライン動画配信という方法だからこそ記録しえたものでもある。

内容も記事を抜粋するだけでは捉えきれない様々な事柄に関して言及をしている。氏の想いは療養所内に住む町民（入所者）と施設の職員の双方に向けられて、前者に対しては、葬儀の参加者を制限せざるをえないことを、「寂しい、苦しい、悲しい。」状況であると述べている。一方、後者に対しては感謝を度々述べながら、医療従事者に対しても感染予防をお願いせざるをえない危機感も明らかにしている。

さらに特定の病気に関連する偏見差別に関して、氏の家族にまで及んだ被害について聞くことが出来たのも本インタビューの意義のひとつである⁽²³⁾。

9. 回復者からのメッセージの意義

岩川氏が書いているとおり、およそ「一世紀」⁽²⁴⁾続いた日本の隔離政策は「回復しえない人生被害」（志村康氏）⁽²⁵⁾を患者、回復者に残した。

2008年の「ハンセン病問題基本法」に盛り込まれた将来構想に基づき、療養所は社会に向かって開かれ、「市民の方たちの憩いの場」（山岡吉夫氏）となるように動いていたが、ここにきて新型コロナ

(23) 岩川洋一郎氏のインタビューはオンライン展示解説と合わせて2021年2月6日に当館のYouTubeチャンネルにて配信し、2022年2月23日現在、1000回を超える再生回数を記録している。URLはhttps://www.youtube.com/watch?v=Wlfi_-i9Xpg&t=1230s

(24) 1907年に施行された「癩予防法ニ関スル件」から1996年の「らい予防法」の廃止に至る90年ほど。

(25) 「コロナとハンセン病 変わらぬ差別「禁止法」を」『熊本日日新聞』朝刊、2020年6月12日、23頁。

ナウウイルスの感染拡大があり、療養所は来園制限を設けるかたちで、入所者をウイルスの脅威から守らねばならない場所となった。あらゆる施設に適切な感染防止対策が求められているが、一方で療養所内の少人数化（2021年5月1日時点で全国13の国立療養所の在園者計1001人）及び高齢化（2021年5月1日時点で全国13の国立療養所の在園者の平均年齢87歳）も相まって、「ハグ握手できぬ絆も遠ざかる」（山内宅也氏）環境に置かれた入所者の孤立も深刻な問題になっている。「コロナ時代 ハンセン病回復者からのメッセージ」展で紹介をした回復者の発言は、環境や療養所によって違いはあるものの、このような社会的な条件の中で、発せられたものである。

これらのメッセージにはいくつかの意義がある。ひとつは来園制限と感染対策によって見えにくいものとなっている療養所内の生活とその変化を伝える当事者による「記録」としての側面である。この傾向は特に園誌に掲載された短詩形文学作品が顕著であり、療養所に暮らす回復者にしか実感出来ない、記録しえない、新型コロナウイルスによる影響を捉えている。

次に社会啓発にとっては必要不可欠な当事者による言葉であるという点だ。本稿を執筆している2021年9月現在、新型コロナウイルスを巡る状況は変化をしており⁽²⁶⁾、改めて現在の視点で回復者の発言にある当事者性の意義について考察をしたい。

まず、本展開催時は偏見や差別を受ける対象が患者、その家族、医療従事者等に限られていたが、現在は国民の誰もが感染をし、差別を受ける当事者になりうる段階にある⁽²⁷⁾。しかし、この状況の中で、専門家、有識者、コメンテーター等による様々な言説がメディアに掲載されたが、一方で罹患をした（回復をした）当事者や医療従事者はどちらかという沈黙を強いられていた存在であっ

た。さらに日々報道される「新規感染者数」という統計と、見えざる当事者という状況は、偏見と差別を助長する理由のひとつでもあった。このことに関連をして、九州大学名誉教授の内田博文は「コロナ禍差別・人権侵害の場合、ひととき強い「同調圧力」をバックにした加害だけに、被害当事者はこれまで以上に「語れない被害者」「相談できない被害者」という状態に追いやられている。」と指摘している⁽²⁸⁾。

このような状況の中で回復者のメッセージは、当事者を「語れない被害者」「相談できない被害者」にする社会の圧力に対する抵抗の声としても位置付けられる。それだけに留まらず、回復者のメッセージは社会の加害を明らかにするだけではなく、被害者自身にとっても認識しにくい被害のありかをも教えるものである。それは、ハンセン病の回復者が隔離政策の被害を訴えることによって、社会の過ちを明らかにしたことと重なっている。

このように、本展は新型コロナウイルスを巡る偏見や差別を理解する手掛かりとなったばかりではなく、改めてハンセン病問題とは何であるのかを考える導きともなった。

最後に、豎山勲氏が「いかなる疾病であろうとその故をもって偏見や差別があってはならない」と発言しているように、ハンセン病問題から引き出す教訓は、あらゆる疾病を対象としており、それはハンセン病問題に関連する新たな啓発のあり方を示唆している。

当館では2020年8月から学校等の団体に向けた常設展示室の解説をオンラインで行っており、合わせて参加者との質疑応答も実施している。最近では新型コロナウイルスに関連する参加者の質問は少なくない。「コロナによる差別偏見は今でもあります。今は病気に対する正しい知識が明らかになっているのにも関わらず、何故差別がくり返

(26) 東京は1回の期間延長を経て4回目の緊急事態宣言を2021年7月12日から9月30日に発令。https://corona.go.jp/emergency/（最終閲覧日2021年9月18日）。

(27) 2021年9月1日には全国の新規陽性者数が最大20029人、前月の8月21日には25633人を記録。厚生労働省ホームページより。https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html（最終閲覧日2022年4月3日）。日本国内の総感染者数は2021年10月30日時点で170万人を超えた。NHK特設サイト新型コロナウイルスを参照した。https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/（最終閲覧日2022年4月3日）。

(28) 内田博文「差別・人権侵害の拡大とその正当化は許されない ハンセン病者差別の歴史からの教訓」（『部落解放 増刊号 特集新型コロナウイルスと差別/マイノリティ』802号、解放出版社、2021年2月）。

されるのか」(2021年6月)、「現在でも病気による差別は残っているが、それに対して私達が出来た事は何か」(2021年7月)、「今でもなぜ偏見や差別は消えないのか」(2021年9月)というのがその一部である。

これらの質問に見られる通り、新型コロナウイルスの感染拡大を契機として、感染症と差別の問題が参加者や来館者にとって、切迫して身近なものになっている。このような社会の関心に応える参照事例として本展がある。上述の質問に対して著者は回復者のメッセージをオンライン解説の参加者に紹介をしている。例えば、黄光男氏、中修

一氏の発言は、新型コロナウイルスをめぐる差別偏見と重なる指摘として、有効な答えのひとつである。

ハンセン病、新型コロナウイルスに限らず、特定の病や障害を理由とした偏見や差別に苦しんでいる人が現在もいる。さらに将来起こりうる新たな感染症の登場を想定して、回復者のメッセージは病気を理由とした偏見や差別の表れ方、構造を指摘し、それを食い止める手掛かりとなるに違いない⁽²⁹⁾。ハンセン病回復者のメッセージにはそのような力があり、それを継承し、伝え続ける意義も本展が示した。

(29) 本展開催中は当館の感染対策が特に厳重な時期で、通常行っている来場者へのアンケートは行わなかった。ここではメールで寄せられた感想を紹介する。「メッセージをひとつひとつ読んでいくと、この1年のことが丁寧に残されていて、ハンセン病回復者の方々による差別の話は、今本当に必要な声だと思いました」。「国、政府が差別された方々に謝罪しても、そこに住んでいる町や村のひとたちの意識がすぐ変わることはないことなど、生活のなかで起きているのに知らない大きな闇(という言葉は適しないかもしれませんが)に気付かずにいると、自分もそこに関与してしまう恐ろしさが常に存在していることを改めて思いました」。